

第1節 独立までの歴史

中国が南宋王朝時代であった 13 世紀に書かれた書物『諸蕃志』に「凌牙門」(Lingga Gate) という場所の記録があり、また 14 世紀に書かれた『ナーガラクルターマガ』には「単馬錫」(Temasek) との記録がある。現在の学者の研究では、一般的にこの凌牙門及び単馬錫はシンガポール島を指すものであるとされている¹。

1819 年、この地に上陸した東インド会社のイギリス人スタンフォード・ラッフルズは、マラッカ経由の中国との貿易ルート確保と、マレー半島地域との貿易拡大のための新しい植民地の必要性から、まずジョホール王国のスルタンの代官(トゥムゴン)と予備協定を結んだ。同年には、ジョホールのスルタン、トゥンク・ロングと条約を締結し、シンガポールを「合法的」に獲得、イギリス商館を設立した。1824 年には、33,200 スペイン・ドルの一時金及び毎月 1,300 スペイン・ドルの年金と引き換えに、スルタンにシンガポールにおける諸権利を放棄させる条約を締結、これによりシンガポールと周辺の島々はイギリスに委譲されることになった。

その後、シンガポールは自由貿易港として発展していく。ラッフルズが初めてこの地に上陸した時、1,000 人にも満たなかった人口²も、中国人をはじめとする移民で膨れ上がり、1901 年には 22 万人を越えた。

第二次世界大戦勃発後の 1942 年、シンガポールは日本の占領下となる。日本軍の降伏により、1945 年、連合軍占領下となったシンガポールは、翌年再びイギリス領となる。1959 年、立法評議会における選挙において、人民行動党(PAP: People's Action Party、以下 PAP)が 51 議席中 43 議席を占め第 1 党となり、リー・クアンユーが自治国³の首相となった。そして 1963 年、シンガポールはマレーシア連邦の州の一つとしてイギリスから独立した。

しかしながら、マレー人優遇政策を掲げるマレーシア連邦中央政府とシンガポールは政治的・経済的に対立していき、ついに 1965 年にマレーシア連邦を脱退、シンガポール共和国として独立することとなった。

ラッフルズの功績

シンガポールを世界史の舞台に引き出したラッフルズだが、彼の功績は次の 3 点に集約される。

- ① 太平洋及びインド洋における交通の要衝としての戦略的位置と天然の良港の存在に早くから気づいていたこと
- ② 職を求める者に対し、その人種を問わず常にオープンにするというシンガポールの性格を決定付けたこと
- ③ 民族間の争いを避けるため、民族ごとに居住地を分けて統治したこと
(これが、現在のチャイナタウン、リトルインディアとして残っている)

¹ 顔 尚強 (Gan Siang King) 著『シンガポールの華人社会』より

² 当時の人口については、諸説あり見解が統一されていない。

³ 同年既にシンガポールは自治国となっていたが、完全な独立国ではなかった。

第2節 国名

シンガポール共和国 (Republic of Singapore)

シンガポールの国語であるマレー語では、「シンガポール」は「シンガプーラ」(SINGAPURA)となる。シンガはライオン、プーラは町を意味するサンスクリット語が起源となっている。

第3節 国旗

1965年制定。国旗はマレーシアの1州であった当時の州旗。三日月は優勢な新興国家を、5つの星は民主主義、平和、発展、正義、平等の5つを、赤は友愛と平等を、白は純血と美徳を象徴している。



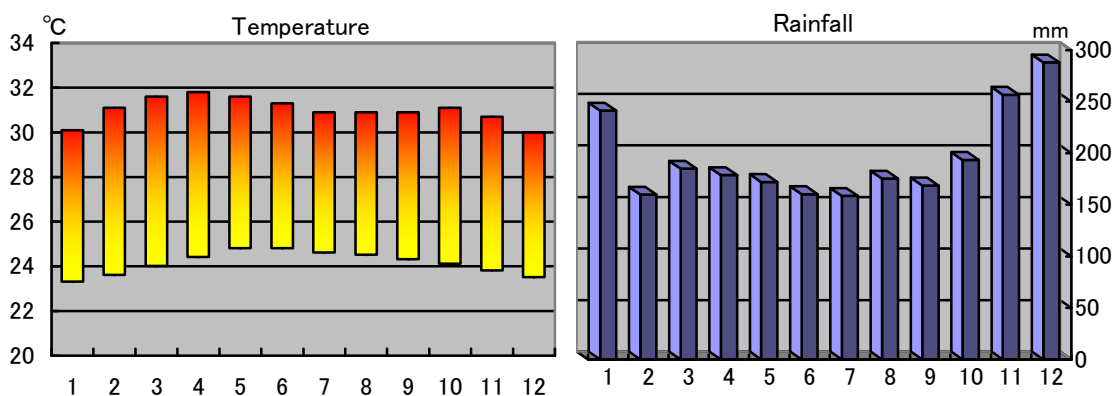
第4節 国土

北緯1度9分～1度29分、東経103度36分～104度25分、赤道の北約137kmに位置する。東西約49km、南北約25km、海岸線延長は約197kmで、その面積は718.3km²である。(参考：東京都23区の面積：622.99km²)

第5節 気候

熱帯雨林気候に属し、年間を通じて高温・多湿で、顕著な季節の変化は見られないが、11月から1月まで雨季のような時期があり、比較的過ごしやすくなる。

図表1-5-1-1 「月別平均気温・月別平均降水量」



年平均最高気温 31.3°C

年間降水量 2,748.4mm

年平均最低気温 25.0°C

年平均湿度 81.7%

出所：National Environment Agency ホームページ及び Yearbook of Statistics Singapore, 2014 に基づき作成

第6節 人口及び民族

ラッフルズの本記であったアブドゥラの自伝では、シンガポールはマレー人 120 人、中国人 30 人から成る小さな漁村だったと記されているが⁴、イギリス領として正式に割譲を受けた 1824 年に実施された人口調査では、マレー系 6,431 名、華人系 3,317 名、インド系 756 名、その他 179 名の計 10,683 名に達していたという記録が残っている。このような民族構成になったのは、イギリス植民地政策下、人口の希薄なマレー地域だけでは十分な労働力をまかなうことができず、中国及びインドなどからの労働移民を流入させざるを得なかったという理由からである。

その後、窮乏する当時の中国南部から東南アジアへ向かう移民が次第に増え、1840 年、既にシンガポールにおける華人系は全体の半数を占め、20 世紀には実に 70%以上を占めるようになった。現在の人口に関する統計は次のとおりである。

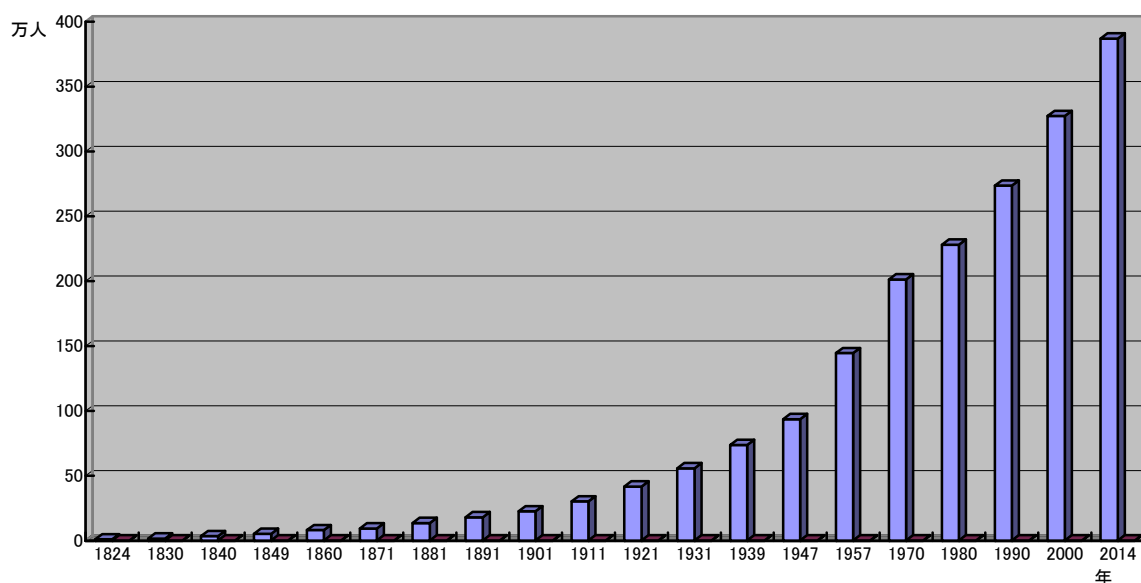
2014年6月末現在

① 人口（永住権保有者を含む）	3,870,739人	
《内訳》 男性	1,902,410人	
女性	1,968,329人	
この他に1,599,000人の外国人が居住している。		
② 人口増加率	0.7%増	
③ 1km ² 当たりの人口密度	7,615人	
④ 平均寿命（2013年） 男性	80.2歳	
女性	84.6歳	
⑤ 中間年齢	39.3歳	
⑥ 平均世帯規模	3.43人	
⑦ 人口比率		
20歳未満	22.0%	
20歳以上65歳未満	67.0%	
65歳以上	11.0%	
⑧ 民族比率		
[華人系]	74.3%	(2,874,380人)
[マレー系]	13.3%	(516,657人)
[インド系]	9.1%	(353,021人)
[その他]	3.3%	(126,681人)
⑨ 宗教別人口比率		
(2010年)		
仏教	33.3%	
キリスト教	18.3%	
イスラム教	14.7%	
道教	10.9%	
ヒンズー教	5.1%	
その他（無宗教を含む）	17.7%	

出所：「Population Trends 2014」、「Census of Population 2010」
シンガポール統計局ホームページ

⁴ 当時の人口については1,000人を超えていたとの説もある。

図表 1-6-1-1 「人口（外国人居住者を除く）の推移」



出所：顔 尚強 (Gan Siang King) 著『シンガポールの華人社会』及び「Population Trends 2014」に基づき作成

第7節 言語

公用語は、中国語、マレー語、タミール語、英語である。1965年の独立時、華人系、マレー系、インド系の三大民族間の妥協案として現在の公用語を制定した。中国語、マレー語、タミール語は、国民の民族・文化的背景から選ばれ、英語はシンガポールが英国の植民地であったという背景と国際的地位を得ることを目的に選ばれた。

また、公用語とは別にマレー語が国語として制定されているのは、シンガポールが1963年から1965年までマレーシア連邦の州の一つであったこと、独立後の経済発展にマレーシア、インドネシアなどの近隣のマレー系諸国との調和が欠かせなかったことといった歴史的、地理的立場を反映したものとされる。しかし、現在では、国語としてのマレー語は儀式での使用という役割を果たしているに過ぎない。

- | | |
|--------|--------------------------------|
| ① 国語 | マレー語 |
| ② 公用語 | 中国（北京）語、マレー語、タミール語、英語 |
| ③ 行政用語 | 英語 |
| ④ 識字率 | 96.7%（2014年） [男性98.6%、女性94.9%] |

出所：シンガポール統計局ホームページ

主な参考文献及び Website

参考文献

1. 顔尚強「シンガポールの華人社会」シンガポール日本商工会議所 JCCI, 2009
2. Census of Population 2010
3. Population Trends 2014
4. Yearbook of Statistics Singapore, 2014

ウェブサイト

- 統計局 <http://www.singstat.gov.sg/>
- 国家環境庁 <http://www.nea.gov.sg/>